

虐待を受けた子どものスピリチュアルペイン についての一考察

前田 美和子*

(2019年1月9日 受理)

A Study into the Connection between Child Abuse and Spiritual Pain

Miwako MAEDA*

'Spirituality' has been somewhat misunderstood as a 'non-scientific' method, influenced by what is generally known as the spiritual boom, which gained prominence in Japan during the mid-2000s in Japan. Such an approach has now become recognized as a part of a popular culture. It was thought that originally 'spirituality should not be scientific or just limited to religious matters, but an exploration of something that is at the center of our very being. Therefore, spiritual pain is something which is felt by us all.

In Japan, spiritual pain has been recognized and legitimized in the field of palliative care. Theories have developed, but particularly that developed by Hisayuki Murata is widely supported. Despite this, Murata's work has not been fully utilized, particularly by those who explore the spiritual pain of children who do not suffer from illnesses.

This article explores how/if children who are abused, suffer spiritual pain. The research framework for this study is based on Murata's theory. Findings suggest that it is possible that such children do in fact suffer a degree of spiritual issues.

Keywords: Spiritual pain スピリチュアルペイン, Children's spirituality 子どものスピリチュアリティ, Child abuse 虐待

1. はじめに

わが国に「スピリチュアリティ」というカタカナ言葉が浸透し始めたのは、2000年代中盤になってからである (Takahashi, 2010)。ちょうどこの頃、「スピリチュアル」に関しては2つの動きがあった。1つ目は1999年に世界保健機構 (以下, WHO) が, それまでの「健康」の定義に“spiritual”を加えようとしたことであり, 2つ目はわが国の大衆文化の中にスピリチュアル・ブームが起こったことである。

1つ目の WHO による健康の定義の見直しについては, 結局のところ早急な改定の必要が見られないとして改訂されることはなかったが, スピリチュアルな側面もまた, 人間の健康にとって重要な側面であることを示したものであった。さらに WHO は, 2002年に「緩和ケア」の定義も示したが, その中にも“spiritual”の単語は見られた。厚生労働省はこれを「生命を脅かす疾患による問題

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

に直面している患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題を早期に発見し、的確なアセスメントと対処を行うことによって、苦しみを予防し、和らげることで、QOLを改善するアプローチである」(厚生労働省, 2011)と、「Spiritual」をカタカナで「スピリチュアル」に翻訳した。そしてその翌年、2012年6月には「がん対策推進基本計画」が閣議決定した。もともと、わが国のスピリチュアルケアに関する研究は臨床的方法論に関する文献、特にキリスト教系の終末期医療における研究が最も多かった(Takahashi, 2010)が、WHOの「緩和ケア」の定義を厚生労働省がカタカナで「スピリチュアル」と翻訳したことで、緩和ケア領域におけるスピリチュアルペインおよびスピリチュアルケアについて、その研究と実践とに大きな影響を与えたことは想像に難くない。

2つ目にあげたスピリチュアル・ブームは、スピリチュアル・カウンセラーと称した江原啓之や細木数子のブームなどがそれで、中村(2011)は「心霊と交流できる特殊能力者によるメッセージの仲介儀礼という形をとるテレビのバラエティー番組、あるいは『スピマ』のようなイベントという形で、誰でも無料でアクセスできる形で展開される大規模な交霊会」と表現した。

このように、「スピリチュアル」に関してこれら2つの事柄がおおよそ通った時期に国内で広がったのであるが、後者にあげた江原の著作がベストセラーになったり、マスメディアで取り扱われたりしたため、大衆に与えた「スピリチュアル」の言葉のイメージへの影響力は大きかった。その結果、一般的に「スピリチュアル」は「古いや前世の霊」といった非科学的な解釈をされ、オカルト的なポップカルチャーとして認識され、両者に大きな隔たりが生じてしまった(Takahashi, 2010)。このようにして独り歩きしてしまったポップカルチャーとしてのスピリチュアリティは、その非科学的ニュアンスを避けられないなどといった理由から、たとえば2003年に立ち上げられた宗教心理学研究会においては、その正式名称に「スピリチュアリティ」を取り入れないなど、学問領域においても影響を与え、その定義や翻訳に影響を与えている(Takahashi, 2010)。

しかし、スピリチュアリティはすべての人間にかかわることであり、スピリチュアルペインは疾病の有無にかかわらず、また年齢や性別、あるいは宗教や民族にとらわれることなく、誰でも抱え得る痛みである。一方で、これまでわが国では緩和ケア領域をはじめとした看護、福祉、心理学等、特に終末期や災害等でのちの終わりを身近に感じている者や、そのケアに従事する者に対しての実践的な研究は多く見られるものの、子どものスピリチュアルペインについての研究はほとんど見られない。そこで、本稿では子ども、とりわけ虐待をうけた子どものスピリチュアルペインについて考察したい。

2. スピリチュアルペインについて

「スピリチュアリティ」や「スピリチュアル」に関しての翻訳や定義付けは、今なお多くの議論がなされているが、まずその語源からみたい。

「スピリチュアル」の語源は、旧約聖書2章7節にある。この箇所は天地創造物語のうち、人間の創造について述べられている箇所である。創世記2章7節には、主なる神が土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられ、このことによって、人が生きる者となったとある。この人間の創造時、神が人の鼻に吹き入れられた命の息はヘブライ語でנְשִׁמָה(ネシャマー)といい、「神の霊」(創世記1:2)や「風」(創世記3:8)とも訳されているרוח(ルーアハ)と

同様の語である。πν (ルーアハ) はギリシャ語の πνεῦμα (プネウマ)、ラテン語の spiritus (スピリトゥス) を経て、英語の spirit へいたる語である (梶原, 2014)。この聖書の記述によると、人がいくらか人の形をしていたとしても、命の息が吹き込まれない限り生きる者とはなっていないため、もともと命の息であるスピリチュアルは、人を生かすもの、人の命の根幹をなすものとして表されていることがわかる。

次に、今日わが国において「スピリチュアル」、「スピリチュアリティ」がどのように定義付けられようとしているのかを見た後、同様に「スピリチュアルペイン」について見たい。

まず「スピリチュアリティ」の定義として WHO (1993) は、「人間として生きることに関連した経験の一側面であり、身体感覚的な現象を超越して得た体験を表す言葉」であるとし、「多くの人々にとって『生きていること』がもつ霊的な側面には宗教的な因子が含まれているが、『霊的』は『宗教的』と同じ意味ではない。霊的な因子は身体的、心理的、社会的因子を包含した人間の『生』の全体像を構成する一因子とみることができ、生きている意味や目的についての関心や懸念とかがかわっていることが多い」としている。

神学者の窪寺 (2004) は「スピリチュアリティとは、人間の危機に直面して、『人間らしく』『自分らしく』生きるための『存在の枠組み』『自己同一性』が失われたときに、それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能」であるという。

看護学の河 (2005) は暫定的な定義として、「個人の生きる根源的エネルギーとなるものであり、存在の意味にかかわるもの」であるとし、「そのありようは、個人の全人的状態、すなわち、個人の身体的、心理的、社会領域の基盤として各側面の表現型に影響をおよぼすもの」としている。

医師の山崎 (2018) は「真に拠り所となる他者を求め、その他者との関係性を通して、どのような状況でも、自己のありようを肯定しようとする人間の特性」としている。

本稿はその定義を明らかにすることを目的とするものではないため、定義づけることはしないが、スピリチュアリティの定義自体はさだまっていないものの、特定の宗教団体や宗教的なものではなく、すべての人間にかかわるものとしての理解は一致をみているといえよう。また、自己の生きている意味や目的など、社会的生き物である人間の存在の根幹にかかわる事柄であることが共通項として見て取れる。

ところで山崎 (2018) は人間存在の4つの要素(身体、社会、心理、スピリチュアリティ)を図1のように図示した。この図では、スピリチュアリティが身体、社会、心理を表す円の重なった中央部分にあり、人間存在の根源的領域にあることを表している。

ところが身体、社会、心理のそれぞれの要素に何らかのダメージがあった場合、そのダメージが深ければ深いほどスピリチュアリティはよりその特性を發揮し、真に拠り所となる他者を求めて自己のありようを肯定しようとする(図2)。この時に生じるのがスピリチュアルペインである。さらにスピリチュアルペインについては、「その状況における、自己と他者との関係性のありようが肯定できない状態から生じる苦痛」であり、「スピリチュアルペインは、すべて、その状況における他者との関係性に起因する」ものであるとしている。



図1 山崎 (2017) より引用

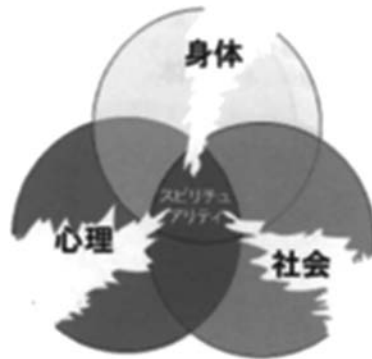


図2 山崎 (2017) より引用

これに類するものとして比嘉 (2008) は、スピリチュアルペインとは「つながりの喪失」や「つながりの不全」が起こることで発症する痛みとし、社会的な生き物である人間が、そのつながりに何らかの支障をきたした時に感じる痛みだという。

緩和ケアの領域において支持されている、いわゆる村田理論を開発した村田 (2011) はスピリチュアルペインについて「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」と定義し、その構造は時間存在、関係存在、自律存在の三次元から解明されるとしている。

つまり終末期がん患者の場合、患者は死の接近によって将来を失うことを自覚している。将来を失った人間は、時間性においては将来の喪失から生じる無意味を感じる。また、死によって人間は自己が消滅と同時に、自己の存在に意味を与える他者をも失う。ゆえに関係性においては他者の喪失によるアイデンティティの喪失、孤独、空虚を体験する。さらに人間の日常生活は自立と生産性、あるいは他者や社会の役に立つことによって支えられているが、死の接近によって身体が衰え、自律性においては自立と生産性 (自律) の喪失から、自己の存在と世界が無価値、無意味に感じられ、また依存、負担、迷惑などの苦しみをを感じる。これらのことから、スピリチュアルペインが生じるという。表1には、以上のことと、その際スピリチュアルペインを感じている者が発する傾向にある発言として村田があげているものをまとめた。

表1 村田 (2011) をもとに作成

時間存在としてのスピリチュアルペイン	無意味、無目的、不条理	「何をしたらいいのかわからない」 「もう何の意味もない」 「早く楽にしてほしい」 「何でこんなことになってしまったのか」 「私の人生は何だったのか」	等
関係存在としてのスピリチュアルペイン	空虚、孤独、アイデンティティの喪失	「孤独だ。自分ひとり取り残された感じだ」 「誰もわかってくれない」 「これから私はどうなるの？」	等
自律存在としてのスピリチュアルペイン	無価値、無意味、依存することに対する負担	「人の世話になって迷惑をかけて生きていても、何の値打ちもない」 「自分で自分のことが出来ないのは、もう人間じゃない」 「何の役にも立たない。生きている価値がない」	等

ただ、村田はあくまで終末期がん患者のケースからこれらの理論を開発しており、命にかかわる疾病を抱えていないケースについては、検討と今後の研究の余地が大いにある。

そこで今回、試験的に村田理論と山崎の定義をベースにし、虐待を受けた子どもがスピリチュアルペインを感じている可能性について検討する。

3. 虐待を受けた子どものスピリチュアルペインの試論

今回は、NHKスペシャル「消えた子どもたち」取材班による『ルポ 消えた子どもたち 虐待・監禁の真相に迫る』に掲載されているユキさん（仮名）のケースを用いることとする。なお、身体、社会、心理的に大きなダメージを受けたと思われる記述に「下線」、スピリチュアルペインによると思われる言動に「二重下線」を引いた。

家族構成：父親、母親、きょうだい（原文ママ）

虐待期間：不明～14歳。ただし、小学2年生の頃から虐待により部屋に閉じ込められ、小学校に通えなくなった。2度家を飛び出すものの警察に保護され、最終的に家に帰された。学校に通えない状態は7年間続き、14歳の時に再度家を出た。その際、警察に保護され、児童相談所に送られて養護施設で暮らすこととなった。

受けた虐待（本人が児童養護施設職員に話した内容による）：

- ・家に閉じ込められていた
- ・健康のためと称し、夏は裸でベランダに出されていた
- ・冬は冷水でシャワーをかけられる
- ・泣くとぶたれる
- ・夜はしばりつけられる
- ・なぐられて血がでた
- ・部屋のドアはガムテープがはられ、部屋の中の椅子にひもで縛りつけられる
- ・ひざまづいて（原文ママ）おしりをたたく。この際、ものさしや木の棒が使われた。数を数え間違えると最初からやり直しされ、体いちめんあざだらけになった
- ・外出時は自分だけおいていかれた

保護以降：発見された当時の様子が記してある資料には「埃や垢にまみれて薄汚れ、ミャーミャーとしか（声を）発せられないような状況であった」と書かれていた。また、発見時にはおむつを6枚重ねてはいていたという話もある。

児童養護施設に来た当初、表情はなく、歩くのもたどたどしい様子だった。自分に対して言われていることは理解しているようで、うーんとうなずく程度の意思表示は出来たようである。また、朝起きてご飯を食べる、毎日お風呂に入る等の生活の基本がわからなかった。月日を経て、それら生活サイクルに慣れてきても、なお、人との関わり方がわからなかった。

施設に入所して半年経つと次第に、①襖を蹴る、人の物を投げる、ハサミを施設職員に向け、廊下の窓に追いつめて網戸を開けて下に落とそうとするなど、昂ぶった感情を表すようになった。施設職員は、これらの行動を「フラッシュバックでお家のことを思い出していたんでしょうか。親には言えなかったことを私にぶつけている部分もあったんじゃないかなと思いました。基本的には、大人を信じられなくて、私に対しても、試してる部分もあったらうし」（原文ママ）と受け止めた。

この他、パニックを起こして扇風機を倒したり、枕を投げたり、洋服を部屋中に投げ散らかしたり、タンスをドアに立てかけ、バリケードにして部屋に閉じ込めたりしたこともあった。また、職員が他の子どもに優しくすると、カーテンを切りつけたり、壁に「死ぬ」と書いたこともあった。

そのようなパニック状態になった時、職員は抱きしめて落ち着かせていたようである。そのように関わっていくことで、次第に関係もでき始めた。職員は「私たち職員が寄り添ううちに、少しずつ関係もでき始めました。安心して生活できる環境のなかで、自分がいろんなことを出しても大丈夫かなと感じて感情を出し始めたんだと思います。自分自身、うまくいかないことへのストレスもあったと思う。とにかく、今、その自分の苦しみから逃げたい、脱出したいと言うのがすごく強かったんでしょ」(原文ママ)と語っている。

高校生になり、ユキさんは次のような手紙を残している。

「わからないよ！今でも、人をうたがってしまう。みんなと違う育ち方がいけないの？頭のびょう気なの？それとも？なんで、みんなと違う考え方しかできないんだろう。②だれもそんな事をみとめてくれないし だから生まれてずっと人々にバカにされ、イジメられるんだね。私はこれからの一年後をどうするの？死んだ方がいいの。なぜ生きてるの？助けて？！」(原文ママ)

この頃の様子を職員は「やっぱり、だんだんとう、周りとの関係ができるようになってきて、他の子たちと自分は違うのかなとすごく悩んでいた時期はありましたよね。なんで他の子はああやってるんだろうとか、それもわからない。そんなときに余計不安になって、ガラスを割ったりすることもありましたね」(原文ママ)と述べている。

その後、高校3年から飲食店でアルバイトをするようになり、店長から「よく頑張ってるね」と褒められたことも嬉しそうに職員に報告したこともあり、働くことや高校を卒業できたことが自信になり、前向きな気持ちにつながっていったようである。

しかし、18歳になって児童養護施設を退所し、「これからも頑張ります」と言い残し、成人向けの自立支援のための施設に入った。

その後、食品工場での仕事も始めたが精神的に不安定な状態が続き、長くは続かず、髪を茶色に染めたり、大声をあげたり、飲酒して暴れたり、職員を突き飛ばす行為を繰り返すようになった。また、③正月やゴールデンウィークなど長期の休みになると、なぜ他の利用者には帰る場所があるのに、自分にはないのかと自傷行為を何度か繰り返した。

この頃、もともといた児童養護施設に電話をかけ、職員たちと直接会ったこともあったがユキさんの不安定な状態は元に戻らず、入所から1年半、退所して他の施設に移った。

その後、いくつかの施設を渡り歩いていたようであるが、ユキさんの足取りは定かではない。

それから3年後、駅のホームから飛び降りて死亡したという連絡が児童養護施設にあった。

以上のケースをもとに、虐待を受けた子どものスピリチュアルペインの検討と考察を行う。

ユキさんへの虐待が生後いつ頃から始まったのかは定かではないが、少なくとも小学2年生から6年以上かけて行われていたことになる。7、8歳の子どもにとって親は自分を保護し、守ってくれる一番の存在である。その親に長期にわたって監禁され、暴力をふるわれ続けたことは、身体、心理、社会ともに深いダメージを受け、スピリチュアルペインを感じていたことが考えられる(下線__)。

児童養護施設に保護されてから半年後に見られた昂った感情を表した様子(①)は、「真に抛り所

となる他者を求め」ていたユキさんにとって、施設職員がそれになり得るのかを試していたと考えられることができる。また、高校生になって書いた手紙(②)からは、表1の「関係存在としてのスピリチュアルペイン」に見られる、誰にもわかってもらえない孤独、アイデンティティの喪失に相当することが読み取れる。

成人向け自立支援施設入所時の長期休暇中の自傷行為(③)も、周りの人たちには「投げ所となる他者」を持ち得ているのに対し、それをもち得ていない様を目の当たりにした、「自己と他者との関係性のありようが肯定できない状態から生じる苦痛」ゆえの行為であると言える。

このように、ユキさんはがん等の疾病を患ってはいないが、虐待を受けていたことによりスピリチュアルペインを抱いていた可能性がかなり高いと言える。

4. まとめ

これまで、わが国において疾病を伴わない子どものスピリチュアルペインについて、具体的に検証されている研究が見当たらなかったため、今回、実験的に疾病を伴わない子どもがスピリチュアルペインを感じ得る可能性について、虐待を受けた子どもを例に村田理論を対応させ、検証を試みた。その結果、虐待を受けている子どもにもスピリチュアルペインが生じてもおかしくない要素と、スピリチュアルペインを抱いていると思われる言動とが見受けられた。

しかし、新聞社によるルポとはいえ実際にインタビューをしたケースではなく、また症例数も1件しかないため、検証としては不十分と言える。今後、実際に子どもたちにインタビューをとり、子どもたちがスピリチュアルペインを抱いていることを明らかにしたい。

引用・参考文献

- 1) 梶原直美：「スピリチュアル」の意味—聖書テキストの考察による一試論—, 川崎医療福祉学会誌 Vol. 24, No1, pp.11-20, 2014
- 2) 河正子：スピリチュアリティ, スピリチュアルペインの探求からスピリチュアルケアへ, 緩和ケア15 (5), pp. 368-374, 2005
- 3) 窪寺俊之：スピリチュアルケア学序説, 初版, 三輪書店, 2004
- 4) 世界保健機関編, 武田文和訳：がんの痛みからの解放とバリエティブ・ケア—がん患者の生命へのよき支援のために—, 金原出版株式会社, 1993
- 5) 中村晋介：「スピリチュアル・ブーム」をどうとらえるか—福岡県内の大学生を対象とした意識調査より—, 福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol. 19 (2), pp. 19-31, 2011
- 6) 比嘉勇人：神気性 (スピリチュアリティ) とは, 看護診断13 (1), pp. 29-83, 2008
- 7) 村田久行：終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア, 日本ペインクリニック学会誌 8 (1), pp. 1-8, 2011
- 8) 山崎章郎：スピリチュアルペインとケア—その理論, スピリチュアルケア研究 1, pp. 53-61, 2017
- 9) Masami Takahashi：老年学におけるスピリチュアリティの理論的研究の歴史と動向, 老年社会科学, 31 (4), pp. 502-508, 2010
- 10) NHK スペシャル「消えた子どもたち」取材班：ルポ 消えた子どもたち 虐待・監禁の真相に迫る, NHK 出版新書, 2018
- 11) 厚生労働省：今後の緩和ケアのあり方について (案), 2011 <https://www.mhlw.go.jp/file/05Shingikai10901000KenkoukyokuSoumuka/0000116614.pdf#search=%27%E7%B7%A9%E5%92%8C%E3%82%B1%E3%82%A2+WHO+%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81%27> (2018年12月25日閲覧)